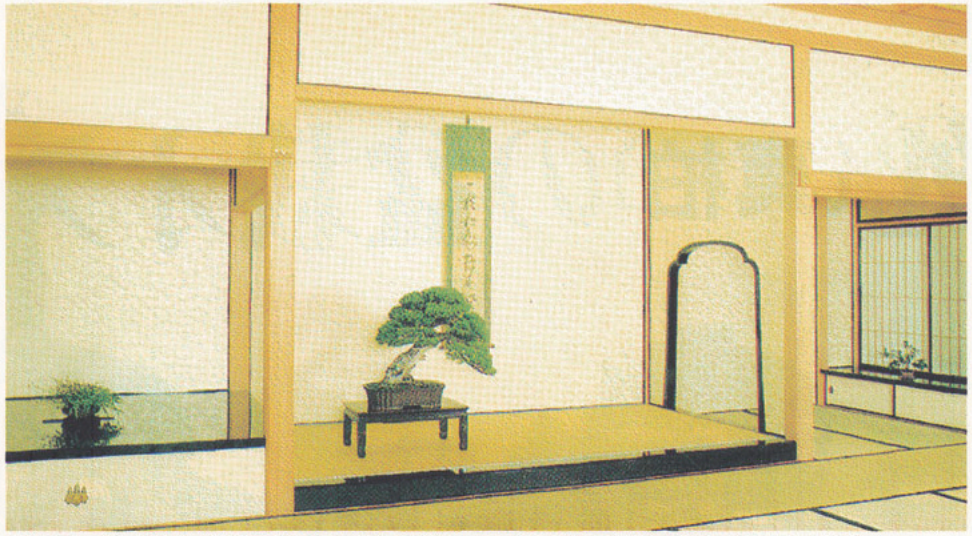
日本盆栽作家協会会報

創刊号

平成5年6月1日発行

第一回作家展

特別出品　五葉松　銘『明光』／古渡泥長方
深山霧島・長寿梅・雪柳寄植え／紫泥輪花
（財）高木伝統園芸文化振興財団



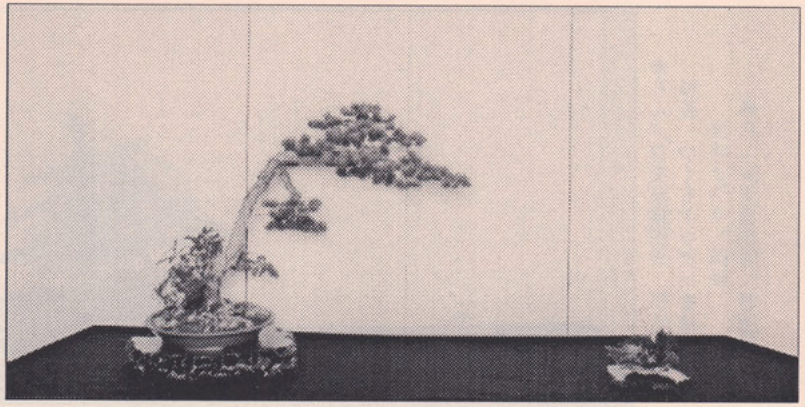
五葉松　銘『葵』／紫泥剣木瓜（陶翠造）　軸／頼山陽筆「一枝松動鶴来馨」
野ばら・隅笹他寄植／南蛮丸　椿／紫泥正方　埼玉県　山田登美男

第1回作家展

会期／平成4年12月11日～13日
会場／東京美術倶楽部2F全室　主催／日本盆栽作家協会
後援／(財)高木伝統園芸文化振興財団　日本盆栽協同組合　(社)日本皐月協会　日本皐月協同組合
日本水石協会　読売新聞社　(株)近代出版　(株)新企画　(株)さつき研究社

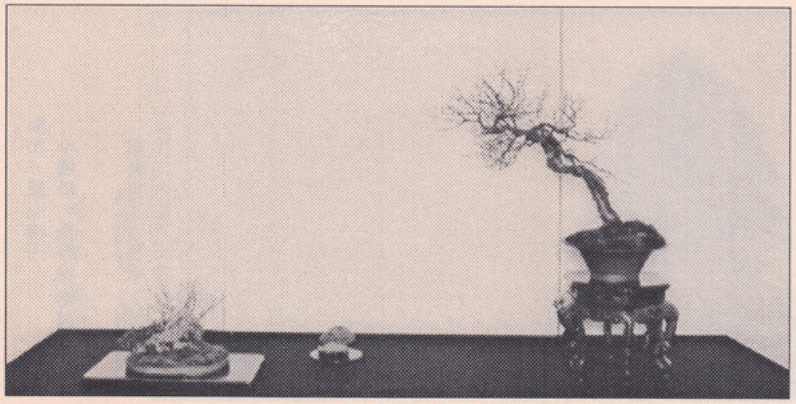
日本盆栽作家協会賞

五葉松／和丸
こけもも・がんこうらん他
寄せ植え石付
福島県　阿部　健一



高木伝統園芸文化振興財団賞

緋梅／和丸
加茂川茅舎石
ドウダン・皐月寄植／緑寿庵陶翠
神奈川県　今井　千春



会報創刊のご挨拶

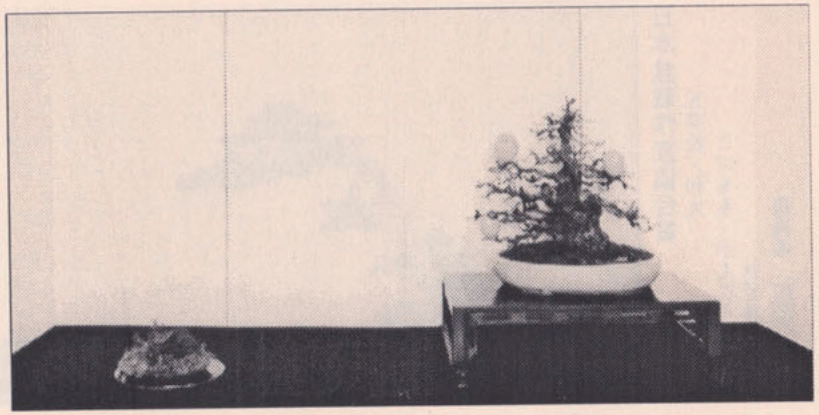
代表幹事　山田　登美男

日本盆栽作家協会も、平成三年七月の発足以来間もなく二周年を迎えますが、昨年十二月には念願の『第一回作家展』を開催し、ここに会報創刊の運びとなりましたことは、多くの方々のご支援の賜物と深く感謝する次第であります。

盆栽はいまや自然と人工の調和による『緑の芸術』として広く普及し、国際的にも多大の評価を得るに至っております。また、環境保護の機運も高まる中、盆栽作家の果たすべき役割も決して小さくなく、ますます豊かな感性を磨き、自然愛を基調とした芸風を確立することが求められております。

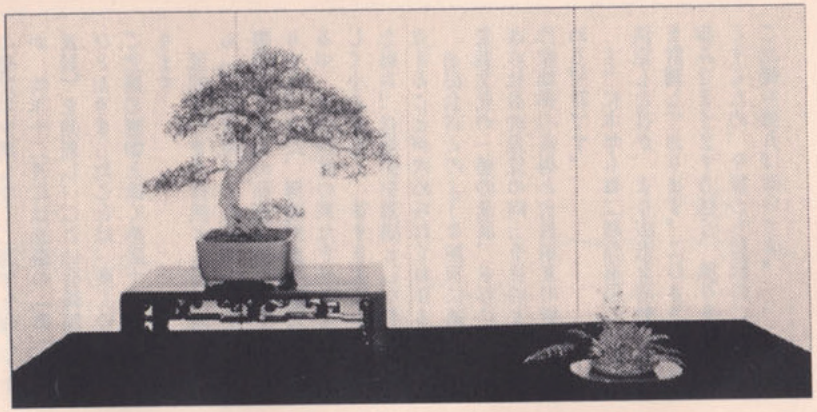
当協会はこのような趣旨に基づき、盆栽文化の一層の発展、さらに盆栽作家の社会的地位の向上を目的として、作家精神の高揚と会員相互の研鑽に努める所存です。

すでに本年も第二回作家展の開催を決定したほか、より広汎な活動の推進を計画しております。このささやかな歩みをますます力強く、実りあるものとするため、今後とも皆様のご理解とご支援を賜れば幸いです。

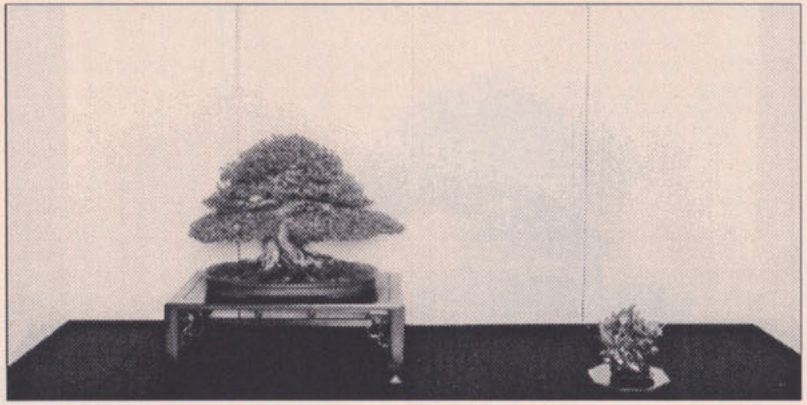


かりん／白交趾楕円
杉苔・つくもドウダン寄植／和丸
富山県　野上　寿明

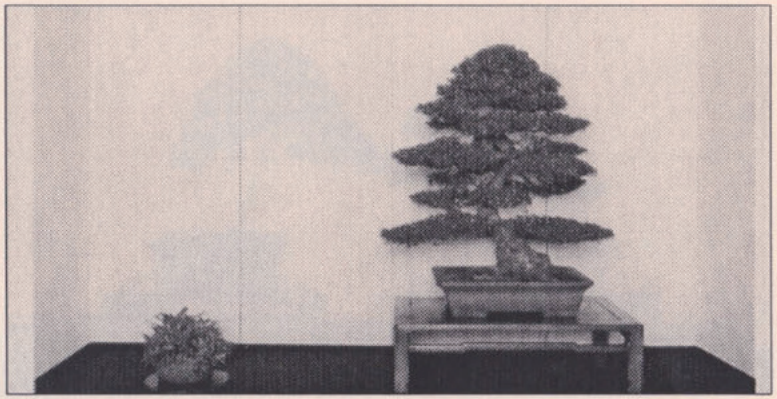
黒松／誠山楕円
小隅笹・長寿梅　寄植／和丸
神奈川県　松田恭治



深山霧島／紅泥正方
梅もどき・うらじろ寄植／和丸
山梨県　江坂　泰樹



皐月（金采）石付／紫泥楕円
岩おもだか／陶板
埼玉県　礒部　孝三



皐月（大盃）／和長方
細葉岩おもだか／和丸
埼玉県　豊田　武男

第一回作家展と賞審査について

本協会が主催する作家展は、盆栽作家の精神高場と高度な盆栽美を作出することにあります。盆栽作家は人間性の豊かな感性を磨き、自然愛を基本とした芸風を表現することが最も大切であり、お互いを研鑽し合い、盆栽文化の一層の発展を切望するものであります。今日の作家群が明日の社会にクリエイティブなボンサイ・アートとして、広く社会に貢献することを期待いたします。

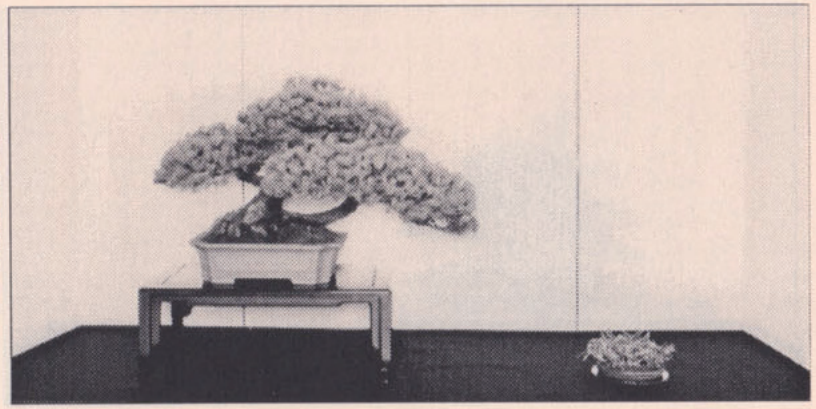
本展は、このような趣旨に留意して出品された作品から、優秀作品を顕彰するものであります。

●高木伝統園芸文化振興財団賞　賞金五十万円
一点

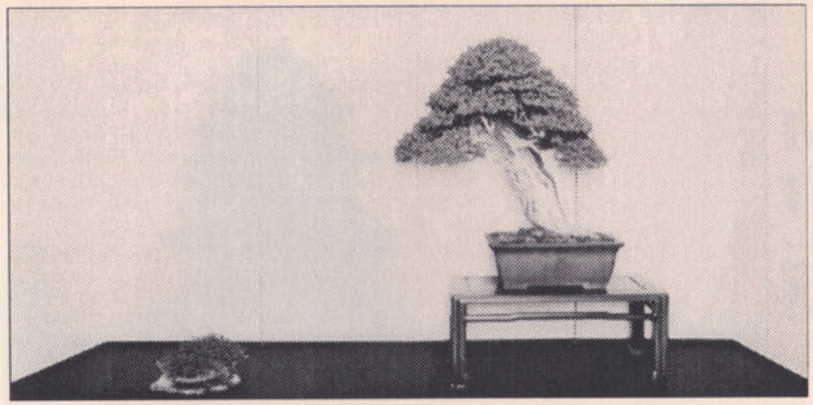
●日本盆栽作家協会賞　賞金五十万円
一点

〈審査委員〉順不同・敬称略
高木伝統園芸文化振興財団賞　高木禮二
日本盆栽作家協会賞
山田登美男　小出征男　江坂泰樹
松田恭治　野上寿明　須藤進

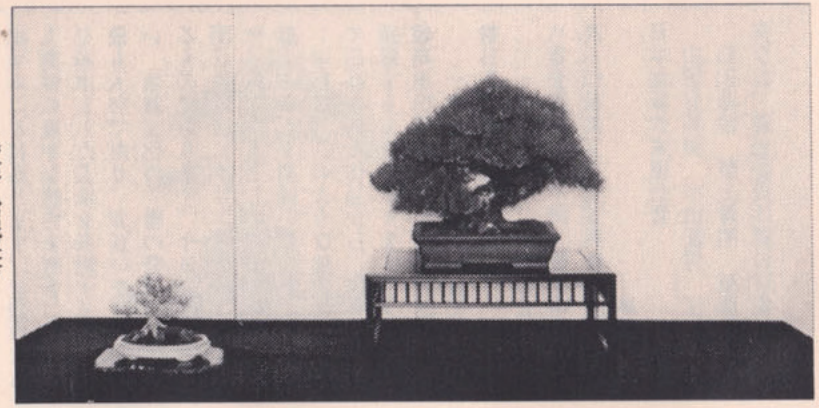
※なお、審査委員は賞の対象外。



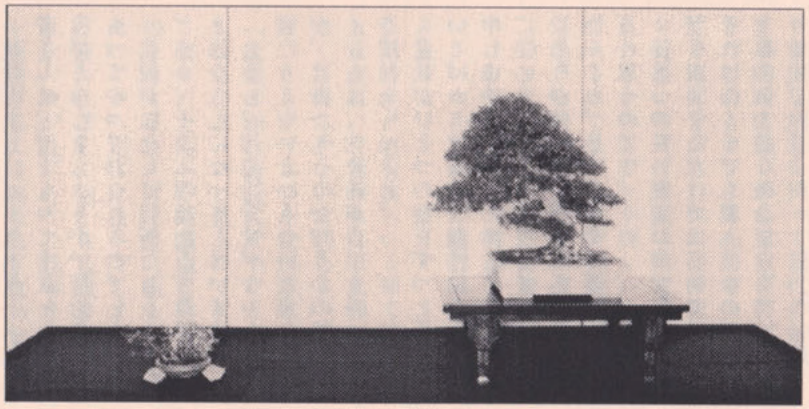
五葉松／和長方
笹／和丸
栃木県　中山　清司



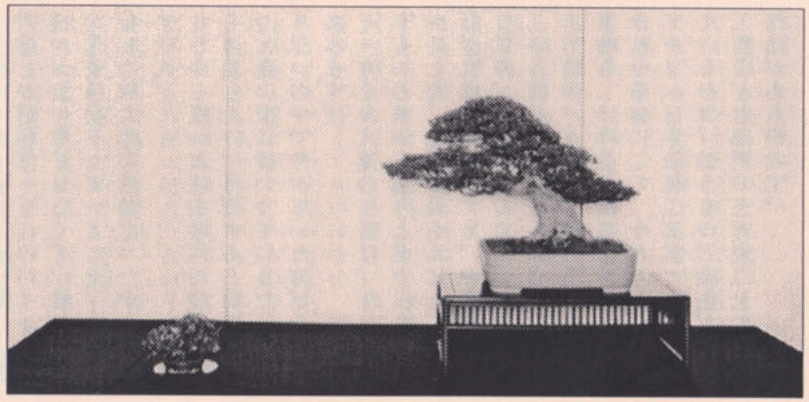
そなれ／紫泥長方
ゴールテリア石付
群馬県　石井　敏夫



黒松／紫泥長方
楓石付／白均窯楕円
神奈川県　松田　大実



皐月（金采）／白交趾長方
小隅笹・長寿梅／南蛮丸
埼玉県　神田　繁彦



皐月（大盃）／和長方
やぶこうじ／和木瓜
神奈川県　渋谷　賢次

作家協会の目指すべき道

山田　作家なくして作品はなく、作品なくして芸術でもないと、原点に帰って盆栽界の発展を考えるとき、作家の育成はこれまでの空白部を埋めるものとして不可欠である。

松田　盆栽を芸術的な次元で捉えて作品を世に送り出し、作家活動だけで生活が成り立つような世界を確率させたい。それには、人間教育も課題の一つとしてある。

須藤　何十年という継承過程での変化にも、異なった美を見出すことができるのが、盆栽独自の芸術性である。作家の創意を表現し得れば、発表時点の作家名とともに、作品評価は可能となってくる。

小出　人に感動を与えるような作品を創り出したい。かつて先人が名樹と賞賛したものばかり追っていては新しい名樹は生まれない。新たな美点を見出せる盆栽、見出せる審美眼を持った人の育成、盆栽の価値観を変えるような作家の登場も願っている。

●月刊『近代盆栽』九二年八月号掲載、当協会顧問・徳尾真砂弘氏（近代出版社長）との座談会より抜粋。

盆栽は芸術か、職人芸か

林屋　晴三（前東京国立博物館次長）

盆栽作家として生きようとされる皆さんは、何をもって作家としての矜持と申しましょうか、目的意識をもってやっておられるのでしょうか。

盆栽がはたして芸術たりうるのかどうか、そこに理論的な背景がないと妙なことになってしまいます。

しかし、理論的背景がないから芸術たりえないといえないと思いますが、芸術たりうるかどうかの第一ポイントは、作家達が自由を持って創造精神をもつこと。

盆栽がひとつの型をずっと追っていくばかりでなく、個性的な作意と申しますか、創意と申しますか、型に従いつつ型から脱皮して、ひとりひとりが個性的な創意のある盆栽を作ること、そこで初めて芸術たりうると思うのです。

ひとつの長い歴史の中で培われた型を踏襲するだけでは芸術ではない。それはあくまでも職人芸なのだという私の個人的な概念規定を持っております。

焼きものの世界で『日本伝統工芸展』というのがあります。わが国における最も大きな工芸家の組織であります。

私は二十年以上も審査員をしておりますが、発足当時はよい会で、ひとりひとりが想いをこめて作家活動をしていました。

当時、荒川豊蔵、加藤土萌、石黒宗磨とか昭和第一世代のパイオニア達がお金に恵まれなくて、貧しい中で作家活動をしていました。それはむしろ職人的な活動だったかもしれません。

しかし思いは桃山時代の焼きものを再現したい、再現すると同時にもっと高い所にはいっていきたいという思いの中でやっていた方ばかりであります。

一方その人達の生活は、今日の焼きものの繁栄を思うと涙が出るくらいでした。荒川豊蔵さんにしても加藤唐九郎さんにしても、お金がなくて米の、升買いなんです。金重陶陽という備前焼の大家もそうでした。

当時のパイオニア達の工芸会は、素晴らしい作品が出ておりました。それを母体にして、今どんどん増えて今日「日本伝統工芸展」を出品しているのは、焼きもの、染色、金漆工芸など七部門で三万点以上の出品作品があるのです。

しかし三万点以上の出品があるものの私の眼において芸術性を感じさせるものは一％ないと思います。芸術は技術ではありません。芸術は作る人に想いがないかぎり芸術たりえないのです。技術的にみると、今日の芸術作品は非常にレベルが高いのです。それはただ技術的にレベルが高いだけあって、技術的にレベルが高い作品が作家や鑑賞者たちは芸術だと思っているようですが、そういうものではないと思います。ただし流通業界などは芸術作品として認めているのですが。

流通業界は人気のある作家のものを求めます。人気のないものは売れないし、人気のあるものは売れる。売れるから売れ筋のものをつくるということで前衛精神は失われていくのです。少なくとも歴史に残るような作品はつくれない。気がついた時はもう駄目なんです。銭になるという恐ろしさが一番重要な問題点だろうと思います。

盆栽の世界ではどうか知りませんが、そこのところが本当に大事なことだと思うのです。一方で伝統を保守しつつ一方で創意を持って仕事を

※本稿は平成３年７月23日、弥生会館における当協会設立総会の記念講演を抄録したものです。

していくということが、今日における理想的な在り方かも知れませんが、これは言うは易く行うは難しいことだと思います。

自由な創意を持って現代の盆栽を世界的に位置づけるならば、どうあるべきかということをお考えにならないと、皆がもたれあって古いものを踏襲して、ごく限られた人たちが良いとかわるいとか美しいとかいっているのでは、盆栽を芸術と考える意義がないと思うのです。

たとえば器ですが、盆栽の鉢としては評価できるが、陶芸としての高いレベルの芸術性は感じることが出来ません。

宋時代、汝官窯という窯で焼いた水仙盤という植木鉢は、世界に五十点くらいしかない素晴らしい名作です。こういうものを全部取り込んで「盆栽の鉢とはなんぞや」というようになればいいと思うのです。

限られた鉢の中で盆栽と鉢との調和を考えるならば、土に植える木もおのずから型にはまってしまう。鉢が変われば土に植える盆栽も変わる。多分、木が先だろうと思います。型を離脱するには鉢も当然変わらなければなりません。

造形意識をもった作家二十～三十人に声をかけて、鉢の公募をやることなども、仕事のひとつではないかと思います。

昨年、利休さんの四百年忌で、京都で展覧会がありました。

利休さんが天正十八年、伊豆の韮山で竹の花入れをつくりました。上下をポンポンと切って、一節を残した長さ約二十七センチの竹の花入れであります。一節残した竹の美的選択の何とも言えない間合いの中で、微妙な、長くてもいけない、短くてもいけない、竹を切った時から造形力のある器になっているのです。

たくさんの竹の中から一本の竹を選び、一節のものを花入れにする。できたものが「尺八」という銘の竹の花入れでありますが、二百から三百点出品された中で、芸術作品のレベルの最たるものは、利休さんの花入れでありました。

竹をポンポンと切っただけでも芸術たりうるのです。そこに利休さんの深い思いが込められており、六十九才の作であります。一本の竹に集中して花入れたらしめようとする。

これは皆さんにお見せしたい。おそらく、志の高い盆栽作家ならば、「なるほどこれがあるべき姿の終着点なのだ」と感ずるに違いないと思います。又、素晴らしい盆栽というものを見せてほしいと思いますが、おそらく通ずるものがあると思うのです。

想い深く、しかも心に自由をもってとらわれのないことが大切なのです。

その精神が桃山時代にあって、日本の最大の文化を構築したのです。

盆栽作家でも、先輩、後輩として敬うことは人間の道として大切なことだと思いますが、芸術家として、また、作家たらんとするならば、心の自由、型にとらわれないことが大切と思います。そのうえに魅力がなければいけません。魅力のないものは、しょせん芸術ではないのです。ピカソにしてもゴッホにしても魅力があります。

最後は魅力ですね。

盆栽にしても、魅力のない盆栽は駄目だろうと思います。ただ型がきれいであるということではないのだろうと思います。

林屋晴三先生の問題提起をめぐって

佐藤　昭夫（実践女子大学教授）

日盆栽作家協会の設立に当たり、林屋晴三先生をお招きして講演していただきました。ご専門の焼き物の世界から芸術を論じられ、たいへん有意義なお話でした。私はここで、林屋先生の話をもう少し具体的にするために、より盆栽に即して私なりの解釈を加えながら掘り下げてみたいと思います。

さて、作家協会の作家協会たる所以は、作家という言葉が入っていることにあります。

まず『作家としての誇りがあるか』ということ。これは『作家としての目的意識はあるか』が根本にあります。目的意識こそが作家の誇りを作っていくわけです。なるほどあの人はああいう目的意識をもって盆栽を作っているのか、それは立派だというふうになって始めて、ほんとうの誇りになっていく。林屋先生はこうした芸術家（作家）の資格を第一に考えています。

さて、目的意識とは、第一に何を作りたいか、これが問題なわけです。たんに盆栽を作りたいというような、そういう大ざっぱなものではない。売れる盆栽を作りたいというのでも芸術にならない。何を作りたいか、この「何」が非常に重要になってくるわけです。

二番目に問題になるのは、では、どうするかということ。自分の表現したいものが、樹木を通じて盆上にどのようにしたら表現できるか、つまり、方法が問題になってきます。方法すなわち技術です。技術はつねに二番目なのです。枝をどのように持っていくか、根張りをどうするかといったことが先に立ってしまうと、それはもう作家の仕事ではなくなってしまう。では、何の仕事かというと、職人芸になってしまうんですね。

そこで、この技術に心をこめることがたいへん重要になってきます。『技術＋心』これが作家という存在をつくるのです。林屋先生も『その中身は何か』で言っている通り、芸術は技術ではなく、つくる人に想いがない限り芸術たり得ないのです。

次は『自由な創造精神を持っているか』ということ。これもなかなか難しい問題です。自由な精神と一言で言えば簡単ですが、厳密に考えると、では自由とはどこで分けるのか。そこで、『型から離脱した個性的な創意をもって盆栽をつくっているか』ということと関連させて考えてみることにしましょう。

たとえば、茶道、華道、剣道、柔道など伝統的なものはすべて、始めは遊びなんですが、その遊びが『道』というものに置き換わってきます。道というのは、本来の意味は修業道です。そして修業は、まさに型にはめることなんです。個人の勝手気ままはいっさい許されません。徹底して型にはめられ、鍛えられる。ですから、自分というものを等閑にして、親やお師匠さんからもらった、教えられた型だけで安心してしまう。型だけをつくっていればよいと……。

盆栽について林屋先生が疑問を抱いているのも、その根底には、盆栽というのはほとんど「型」だけでできているのではないかという考えがあります。型にはまった美しさというだけでは、もう今日の人々は振り返りません。例えば『売れる盆栽が優れた盆栽』と考えるようになったら、芸術家でも作家でもない。心や魂は、逃がした後を追っても、けっして元には戻らないのです。美術、芸術に限らず、どこの世界でも多種

※本稿は平成３年11月15日弥生会館における研修会講演を抄録したものです。

多様になり、受け取る人のニーズも多様化していますから、芸術的な中味の乏しいような、従来の型にはめたものばかりつくっていたのでは飽きられてしまいます。見捨てられてしまうんですね。ここのところが非常に問題なのです。そういうときに愛好家の心を捉えるようなものがあるかどうか。それが問題です。

大事なことは目的意識になります。この目的の中味は、あくまでも自分の自由な心が選んだ、何を作りたいかという自覚、意識です。型にはめるとか売れる盆栽を作るというのではなく、もっと人間として、自分の深い部分から出てくる何かがなければならない。

ところで、技術についてはじつは非常に大事な問題でして、芸術をつくるのに技術はいらないんだと簡単に考えられても困るのです。こういう『深い心』を抱いた人ほど、じつは優れた技術を持っていなければ駄目なのです。というのも、歴史をひもといてみれば、職人から作家へ、作品を作る人の気持ち、考え、意識が脱皮していく、それが芸術の世界を新しくしていく根本の動き方だからです。例えばピカソはもとはステンドグラスの職人でしたが、そこでも並々ならぬ技倆を発揮しています。もし二流三流の職人だったなら、彼が芸術に目覚めたとき、果たしてあれだけの一流の作家になったでしょうか。

その意味で私は、技術あるいは職人という面を、芸術においては絶対におろそかにできないと申し上げたい。優れた職人として自分を鍛えながら、しかしそこに溺れず、型から抜け出す。そういう自由な発想をいつも自分の中に育てていく。温めていく。こうした生き方を日々重ねていく必要があるのではないでしょうか。

ここで林屋先生は利休の竹花入れを例に、「数奇」の美意識について話されています。これもやはり、型にはまらないということです。

この数奇という言葉はいろいろな言葉を宛てることができます。好き、数寄もそうですし、隙間もスキでしょう。さらに空虚の空も虚も、やはりスキです。まさに利休の「数奇」は、この隙間でもあり、あの竹花入れはむしろ虚とでもいうべきでしょう。

「数奇者」という言葉があります。これももう単に盆栽の好きな人という意味ではないのです。先ほど数奇の精神は型にはまらないことと言いました。盆栽の型である「三角形」の中にどういうふうに隙間を作っていくか、どこにどういう空間を作っていくのかというようなことも、一つの大事な提起となるように思います。この言葉もぜひ皆さんの中にとどめていただきたいと思うのです。

『盆栽の魅力とは何か』林屋先生は最後に魅力を取り上げています。自由な、個性的な創造精神こそが魅力の源泉であると、林屋先生は言っています。あくまでも心の必然的な求めで、型を破ってどこへいくのか、どういう盆栽を作るのか、そういう自分にとって重要な問題でなければなりません。

確かに「自由」という言葉、さらに「創作」「創造」などの言葉も手垢がついています。その手垢を洗って、皆さんなりの心の自由、皆さんなりの目的意識というものを、言葉によりかかることなく、ぜひ見つけていただきたいと思うのです。

盆栽の芸術性について

片山　一雨（景道片山流家元）

盆栽が自生している樹木の縮図を盆上に再現するだけなら、芸術ではなく、おそらく園芸の域を出ません。自然の樹木を手本としながら、自然よりもなお優れた形姿に作り、さらに知性、理性、品性も感じられるような作品にする――そこに盆栽の芸術性がある。それ以外にないと思います。

もちろん、盆栽に優雅や風雅をつけ、さらに格調を高めるために鉢の選定もあります。名木があり、それにピタッと合う名鉢がなければほんとうの芸術はできません。主木と鉢とが調和して一体化し、しかも陳列したときに格調を高める飾りができてはじめて盆栽芸術が生まれるのです。

ところで、絵画や彫刻は創った、完成した時点で「止まる」ものであるのに対し、盆栽は止まりません。これが他の芸術と違います。皆さんが名木を創っても、そこで止まらない。明日の名木へと進むのです。だから、芸術家がついていなければ盆栽という芸術は保存されません。芸の連続です。これでいいということはない。生きているのですから、名木は。

盆栽は油断がならないのです。一人の名人が創っても、他に移ったときにそれ以上の優れた名人が引き継がなければ、名木の維持はできない。盆栽は一代で終わらないのです。明日ダメになってしまうかもしれない。極端に言えば、おそろしい芸術です。だから、あくまでも自分が一番上に立つくらいの気持ちで臨まなければ、作品が崩れてしまう。

作家協会の皆さんに期待したいのは、そういう作家意識と誇りとをつねに持っていただきたいということです。

お互い切磋琢磨して、名木を明日へ、後世へと維持していく伎倆をぜひ身につけていただきたい。

つまりは人間です。芸術品を作る人間が肝心です。人間ができなければ、その作品が認められるわけがないのです。

飯塚琅玕斎という竹芸の先生がいます。そこに飯田清石という、今は日本工芸の一流作家ですが、当時は二五才ほどでしたか、それが書生をしていましてね。琅玕斎に私が尋ねたことがあるんです。

飯田ももう十年くらいいるのだから、下ごしらえ程度のことはできるのかと。すると、琅玕斎が「そんなことを考えているのか」って言うのですよ。「飯田はちょうど十年になったから、これからですね。竹芸家だから、花の一輪ざしのような修業をさせ、概論程度でもお茶や華道をやり、さらに落款の稽古をさせて、それから下ごしらえにかかる。もしあなたの言うように十年もやったからと言うのなら、これはザル屋の職人になったほうが早いし、お金にもなる。そこが職人と芸術家の違いです」これには私も驚いてしまいましてね。恥ずかしいことを尋いてしまったと思ったものです。

芸術家と職人の違いは、結局は基礎、つまり教養の違いです。

皆さんは作家であるから、自信をもって作品を売ってください。ただ、そのためには、作家としての教養、常識がそなわった人間になることが先決です。

一方、人生ときには息を抜かなければならないこともあるでしょう。遊ぶなら上手に遊びなさい。遊んで

※本稿は平成4年5月21日、弥生会館における第2回通常総会講演を抄録したものです。

いるうちに何かをつかんでください。「同じ遊ぶにしても何か取ってこい」私も若いときはそう言われたものです。遊ばない人間はダメですよ。

それから、私は苦労しない人は嫌いです。苦労しないでポッと育った人間の話はどうも信憑性がありません。

だから皆さん、お金があろうとなかろうと苦労してください。

ただし、苦労が一生身についている人間はやっぱりダメです。いつでも貧乏性の人間は。

たとえ前はどんなに苦労していようが、それが片鱗も出ない人物になりたいですね。前は何でもかまわないのです。今ピチッとやっていて、ちっとも苦労が出ていない人物、いますよ、そういう人が。私はそういう人、敬服しますね。

何か人生談義のようになりましたが、結局のところ、人間が先にできないと、少なくても平行してできていかないと、作品にも特徴が出ないのではないですか。

商売は立派にやってください。そして、商売となったら百円でも頭を下げてください。

しかし、作家の心となるとまったく別物です、これは。作家の誇りというのは全然違う。作家としてお辞儀するのではなく、商売としてお辞儀するのだということを忘れてはいけません。百円でも五千万円でもおなじです、商売は。

商売とは別に、作家として自分の作品に誇りが持てるというところに皆さんの幸せがあるのではないですか。そこのところです、大事なのは。

最後に、飾りについて一つお話ししておきます。これも人間ということを抜きには考えられないのです。やはり人間の幅がなければなりません。

飾りとは、詰まるところは己（おのれ）なのです。自分です。見せたいというのではない。だから私は演出という言葉を使ったことはありません。演出というのは人に見てもらいたいからするのです。

飾りというのはそうではない。映画や芝居ではないですから。

自分なりに最高の努力を払った作品を相手が見るんですよ。人によく見てもらおうというような、そんなちっぽけな根性ではないのです。

だから皆さん、飾りの場には自分がそこに座っているんだと思ってください。己が肝心です。それで基礎的な、いろいろな教養が必要だとお話ししているのです。

昔は名人というのは、一つのことをやればよかった。一本槍です。ところが今の名人は、その専門分野ではもちろん誰にも負けないけれども、他の教養も全部ついているから、さらに光る。そこが昔と今とで少し違うように思うのです。

このことは皆さん、ぜひ覚えてください。盆栽だけでいいというのでは通用しません。盆栽は確かに専門には違いないけれど、それに付随する立居振る舞いとか、礼儀作法とか、そういうものが加わって、はじめて光るんですよ、その作品が。

私のお話ししていることは、あるいは理想に近いかもしれません。理想と現実は違います。しかし、理想がなければ、結局は歩けないということ。そのことを申し上げたい。理想だけれども一歩一歩それに向かって実行していくことをお願いしたいのです。

日本盆栽作家協会 設立からの活動の経緯

本格的な盆栽作家集団を目指す日本盆栽作家協会(代表幹事・山田登美男)も平成三年七月の発足以来間もなく二周年を迎え着々と地歩を固めつつあるが、ここでは今日までの活動の経緯を振り返ってみたい。

さて、一年目は協会として進むべき方向を模索しつつ、林屋晴三先生、佐藤昭夫先生、さらに片山貞一先生を迎えての研修会、自生地見学（黒部、立山）を開催し、一方で作家個々としても、山田登美男氏による第一回彩花盆栽展(新宿三越)や須藤進氏による景道流派展（竹楓園・自彊亭）などを始めとする活動を展開してきた。

そして、設立一周年を前にようやく第一回作家展の開催が具体化し、会期は平成四年十二月十一日～十三日、会場は東京港区の東京美術倶楽部二F全室、陳列方法も床の間や屏風を用いての座敷陳列とすることが決まった。

こうして『作家展』開催へ向けて全会員が一丸となって進む中で、協会の活動もより実践的な研修主体にプログラムされることになる。

竹楓園自彊亭教場においては礼法、作法の研修のほか、作家展の陳列に使う六曲半双鳥の子屏風を用いて数点の盆栽を模擬陳列し、空間を把握するなどの研修がなされた。

引き続き清香園では、会員各自が作品を持ち寄っての、より具体的な研修の場も設けられ、さまざまなアドバイスや厳しい指摘も飛び交う中で相互の研鑽に努めた。

さらに数回の打合せを経て、ようやく作家展開催。来場者には落ち着いた雰囲気の中でゆったりと盆栽鑑賞に浸っていただき、併催のお茶室や特別内覧会場もくつろぎや懇談の場として好評だった。

また、協会賞に加え、（財）高木伝統園芸文化振興財団からも賞を付与していただいたことは、会員にとって大きな励みとなるものである。

こうして出品準備や運営に一抹の不安を抱いての第一回作家展も、結果として予想以上の反響が得られたことは会員にとって何よりも得難い、貴重な体験となり、本年の新年会において第二回展開催の決定を見るところとなった。

今後はますます会員の結束を強め、また、対外的な交流の場も積極的に活用し、協会活動を大いに盛り上げていきたいものである。

会員だより

●新入会員紹介

福田　稔氏

昭和30年9月14日生

鹿沼市茂呂町一〇二三

電話〇二八九(七六)一四八八

※日本盆栽作家協会では広く会員を募集しております。入会資格はプロ、アマを問いません。盆栽作家としての自覚と意欲のある方なら、どなたも大歓迎です。

入会金　三〇万円

年会費　五万円

お問い合わせ先

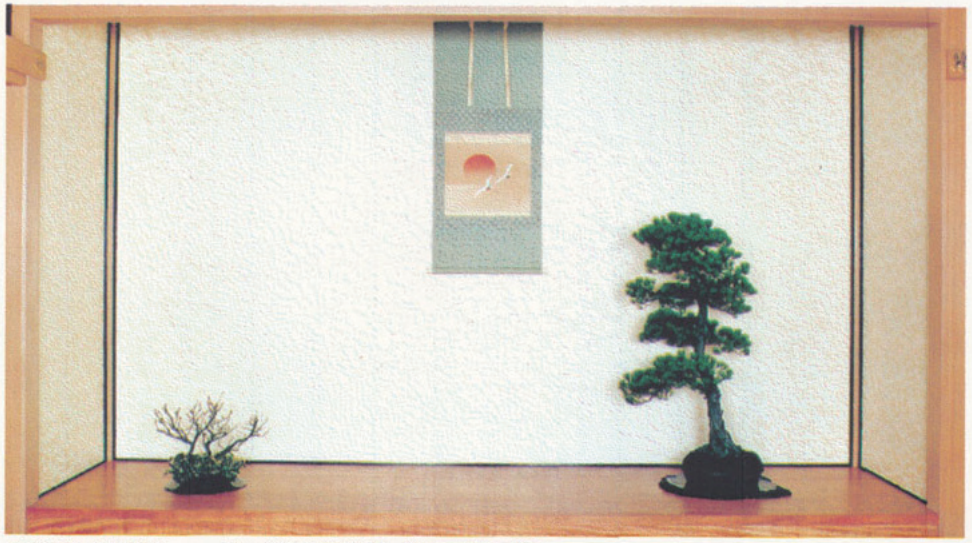
日本盆栽作家協会事務局（小出 征男）

〒一五二　東京都目黒区柿の木坂　三ー一〇ー八

電話　〇三ー三四一一ー二四三七

緋梅／白交趾長方　軸／今尾景祥筆「富士」
常盤姫はぎ／広東楕円

東京都　小出　征男



五葉松／南蛮丸　軸／広田百豊筆「日の出に鶴」
野梅・笹寄植／和丸

栃木県　須藤　進

発行／日本盆栽作家協会 事務局（小出征男）
〒152　東京都目黒区柿の木坂 3 - 10 - 8　　TEL 03 - 3411 - 2437